

砂味

私は昔から掃除機の音が苦手で、ルンバさんが動き出したが最後、節分の鬼のごとく逃げだします。家にいるな外に出るとルンバさんに追い立てられ、すすすこと靴を履いて、いずくんぞいかにやとあてどない散歩に出るのでした。

もしかしたら大体の皆さんがそうなのかもしれませんが、私は外に出る時、靴を履いています。よほどのことがない限り、裸足では歩いていません。裸足で駆けていたらササエさんのごとく、みんなの笑いものになるでしょう。

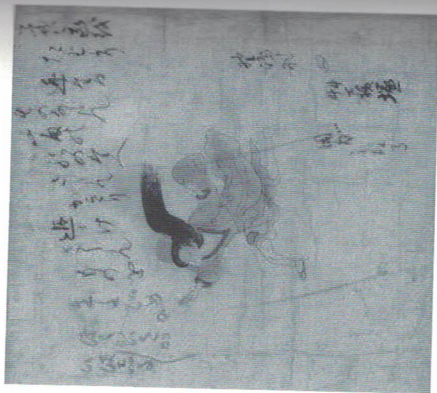
そして、ササエさん以外にもうひとり。よほどの事があつて裸足で駆けていく女性があります。

道成寺縁起の清姫です。

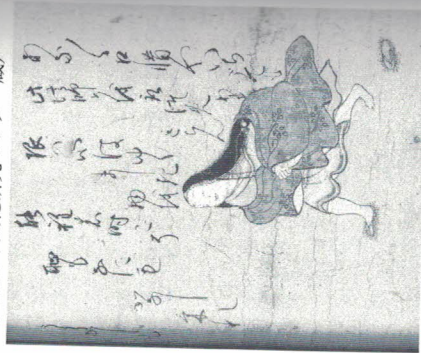
一、裸足の清姫

愛しい安珍を追いかけ、激情に駆られ日高川を渡り蛇身と化した清姫は、和歌山県日高群の道成寺の鐘に隠れた安珍を鐘ごと焼き殺します。(写真一 道成寺)

清姫は、約束を交わしたにも関わらず再び自分に会いに来ない安珍を求めて往来の人々に行方を尋ね歩きます。安珍が彼女の住む真砂を既に去った事を知った清姫は激怒し、彼を走つて追いかけます。その時、清姫が脱ぎ捨てた草鞋が道成寺縁起絵巻に描かれています。



図一 道成寺縁起絵巻 (国際日本文化研究センター蔵)



図二 道成寺縁起絵巻 (道成寺蔵 (伊東史朗『古寺巡礼 道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』より))



図三 釣鐘まんじゅうのおまけ

草履への関心は、清姫が草履を履き捨てたとされる御坊市名田町野島に草履塚まで建立させるほどです。図三は現在も道成寺門前で売られている土産物の釣鐘まんじゅうに同封される道成寺縁起をわかりやすく絵にしたもので、場面単位でコマに分けて描かれる中に草履塚が一コマ消費して採用されています。

草履を脱いだだけの場所が伝説に紐付き、観光のチェックポイントと化するのはなぜなのでしょう。脚フエチなのでしょう。

私たち日本人が履物を脱ぐ場面としてまず家など建物に入る時が思い浮かべられます。欧米の土足生活文化とは履物を脱ぐ感覚が全く別物でしょう。

そして、宗教的な場面においても私たちは履物を脱ぎます。月山参りの際は山頂で草鞋を脱ぎますし、琉球に点在する霊場である御嶽にあがる際もやはり履物を脱ぎます。

以前、鹿児島県徳之島の法事に参加する機会がありましたが、奄

ます。(図一 道成寺縁起絵巻 国際日本文化研究センター蔵) (図二 道成寺縁起絵巻 道成寺蔵)

多くの道成寺縁起絵巻に脱ぎ捨てられる草鞋が描かれています。道成寺は現在も道成寺縁起絵巻の絵解きをしています。住職の飄々とした軽妙な語り口で笑いを取りながら説かれる女人蛇体譚の中にも、草鞋が脱げる場面があります。

矢も盾もたまたらず追いかけ始めますが、歩いては追いつけません。だんだん清姫の姿も乱れてまいります。もう履物が脱げても拾う暇がない。こうして真砂の里から道成寺まで十六里(六〇キロ)追いかけることになります。(伊東史朗『古寺巡礼 道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』道成寺 二〇一三年)



写真一 道成寺山門 (著者撮影)

美群島で独自発達した神仏習合墓は一段高く白砂が敷かれ、そこには土足で上がることははばかられていました。

履物を脱ぐ事は空間的移动とともに精神をスイッチする動作となっているようです。

日本人の履物を脱ぐ動作で特筆すべきは、自殺する時のそれでしょう。ドラマなどで、崖やビルから身投げする時、首を吊る時、靴を脱いで揃えているのを見た事があると思います。

この習慣は意外と古く、太平記や源平盛衰記など、遅くとも十四世紀のテキストに入水自殺の際履物を脱ぐ描写が確認できます。(参考:川部裕幸「自殺の作法一一(履物を脱ぐ)を巡って」『歴史民族学一九号』批評社 二〇〇二年)

こうして見ると日本人にとって履物の着脱はイエの出入りによる、至極日常的な動作によるものと、宗教性が絡む動作の両種があるものの、どちらも精神的かつ物理的な世界の移動を伴うものです。

清姫の草履の草履が脱げる場面は、道成寺所蔵の道成寺縁起絵巻ではこう書かれています。

「能程の事にこそ恥の事も思はるれ。此法師めを追究さ覽限りは、はき物もうせふかたへうせよとて走候」(図二)

約束を違え真砂に寄らず安珍既に去る事を知った清姫は激怒狂乱し、草履が脱げるのも構わず走り出します。ここで往来の人々の反応が描写がされており、「ここなる女房のけしき御覧候へ」「誠にあなをそろしの気色や」と、清姫の姿を見てドン引きしています。この場面に他者の視線を差し込んでいるのは、物語としても教えを説く仏教説話としても意味のあることでしょう。

そんな世間の目を振り切らんばかりに走る清姫の激情と健脚が光ります。

この時、清姫は草履と共に社会的人間の部分を履き捨てたのです。もはや帰れぬ怒りの熊野街道を駆ける誰よりも人間らしい彼女は、その人間らしさゆえやがて人としての姿さえも捨て蛇身と化して安珍の蒸し焼きを作り上げ、消えていきます。

草履塚とは、清姫が草履と共に捨て去った彼女の社会的人間性が埋葬された場所でもあるのです。

二、雪女の残したもの

小林正樹『怪談』(東宝 一九六五年)は、ラフカディオ・ハーン作の短編から、「和解」「雪女」「耳なし芳一」「茶碗の中」を映画化したオムニバス作品です。カンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞

する評価を受けているようです。「雪女」「耳なし芳一」に関してはほぼ忠実にあらすじをなぞるのに対し、「和解」(映画では「黒髪」と「茶碗の中」は終盤を大きくアレンジされ、原作とは全く別の物語性を持ったものになっているのですが、「雪女」にも原作にはない気になるシーンが新たに増えています。草鞋です。

吹雪の山小屋に閉じ込められた巳之吉は、突如現れた恐ろしく美しい雪女が同行者の茂吉を殺す様を目撃します。巳之吉は「今夜見たことを誰にも話してはいけないよ。もし話したらお前を殺してしまふからね」と雪女に言い詰められ山を降りました。その後病みつくも回復した巳之吉は、一年後、旅の「おゆき」という女と出会い結婚します。十年の時が過ぎ、夫婦の間には数人の子も生まれ、誰もが羨む家族となっていました。正月の準備におゆきが子供の着物を仕立て、巳之吉が家族の履く飾りをつけた草鞋を編んでいた時、ふと思い出し十年前の雪女との出会いを話してしまいます。おゆきは雪女の正体を現し、約束を破った巳之吉を責め、「本来であればここで命を取るのだけれども、子供達のためにそれはしないでよく、子供達をよく育てなさい」と言い残し姿を消すのでした。

後には巳之吉がおゆきのために編んでいた飾りのついた草鞋が残されていました。

草鞋に関する意味深な描写はハーンの原作にはなく、監督の小林正樹、脚本の水木洋子による脚色(草鞋だけに)であるようです。

人間として生活していたおゆきの時は当然履物を使い、雪女である時は履物を拒絶します。映画の中で雪女が最初に山小屋に現れ、茂吉旦那を凍え殺し、巳之吉と約束を交わして去る時も、雪女は裸足でした。

この映画の中での履物は明確に人間と妖怪を区切る象徴物として使われています。

三、鬼太郎の下駄とねずみ男の足

ここまで妖怪と人間を分かつ象徴物としての履物を視覚表現の中から見てきました。

江戸時代の妖怪絵巻や妖怪図鑑の妖怪たちの足元を注意深く見れば、例外はありますがその多くがなにも履かない素足であることに気がつきます。これもまた履物が人間文明側の物品であり、そこから一線引かれた化け物達は素足であるということでしょうか。例外のひとつとして「化物婚礼絵巻」で礼服をきた妖怪たちの一部は草履を履いており、足元まで気を配った人間文化のパロディとなっているようです(図四)。天狗の下駄に関しては、妖怪としての特異性、寺社や山岳信仰との関わりから、考察が長くなりそうで、また別の機会に譲りたいと思います。



図四 化物婚礼絵巻(国際日本文化研究センター蔵)

日本人がさして気に留めなかったこの履物の描写を鋭敏に受け取り、独自に昇華したのが韓国の大衆映像文化でした。

韓国内の民話や怪談を取り扱う人気ドラマシリーズ『伝説の故郷』。日本で言えば「まんが日本昔ばなし」と「世にも奇妙な物語」を合わせたようなものではないでしょうか。日本の「雪女」をアレンジしたと思われる「九尾狐」の話が番組内で七〇年代から数回作品化されているそうです。

男は吹雪の山で雪女ではなく九尾狐と会い、誰にも話さない事を約束し、家路につきます。彼は帰りに美しい女と出会い、やがて結婚し、子供も生まれ幸せに過ごすのですが、雪山の日から十年経たんとするある日、妻に九尾狐の話をしてしまいます。妻は九尾狐の本性を現し、約束を破ったことを強く批難します。曰く、あと一日だけ男が話さず、女が人を殺さず十年経つていれば人間になる夢が叶ったのに。と。

九尾狐は男を殺そうとするも、情ゆえに殺せず、そのまま山に去っていきます。

男は妻のために作っていた靴を取り「せめて靴だけでも持つていってくれ!」と山に向けて嘆き叫ぶのでした。(「九尾狐」『伝説の故郷』一九九七年版)

この靴のくだりは小林正樹『怪談』の強い影響が感じられます。『怪談』と比べるとよりわかりやすく、履物が象徴物として処理されています。

韓国も日本と同様に家の中では靴を脱ぐ生活様式であり、自殺の際靴を脱ぐのも共通しているようで、履物に対する心性が比較的近いからこそ成立したアレンジでしょう。

きて、下駄と妖怪といえば、誰もが思い浮かべる水木しげる『ゲゲの鬼太郎』のリモコン下駄（初期はきたろうげたの表記も）です。（図五）

カランコロンと下駄の音と共に現れ、事件が終わつたらまた下駄を鳴らして去っていく鬼太郎。下駄の音のカランコロンは鬼太郎を象徴するものです。「明日天気になあれ」の呪いのごとく蹴り上げた足から飛んでいくリモコン下駄が自由自在に動き、敵の妖怪を打つお馴染みの絵。『墓場鬼太郎』にはこのような場面はなく、テレビアニメの放映が始まつてから発生したギミックのようです。（漫画でのリモコン下駄初出と思われるのは「げた合戦」『週刊少年マガジン』二七号 講談社 一九六八年六月三〇日発行）

妖怪と裸足と履物の歴史に鬼太郎を当てはめたとき、リモコン下駄の攻撃のワンアクション内に、「脱ぐ」と戻つて来た下駄を「履く」、二つの動作が込められていることに気がつきます。

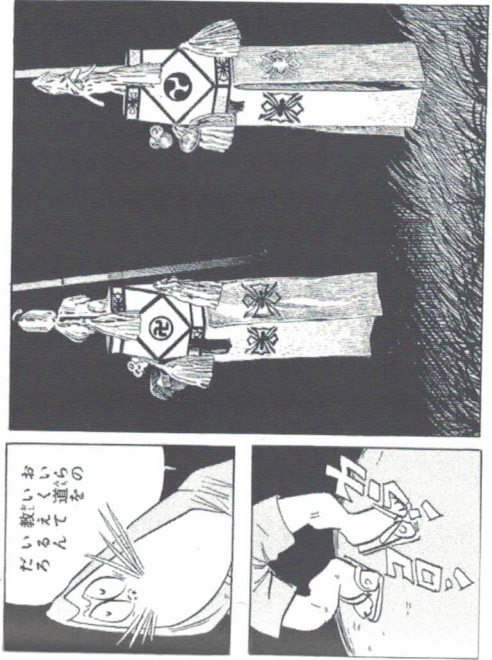
履物の着脱は、私たちのこちら側と清姫や雪女たちが去つていったあちら側を隔てる象徴的しぐさです。

鬼太郎はよく妖怪達から、妖怪のくせに人間なんかの味方をしやがつつと批難されます。そんな鬼太郎の両義性をリモコン下駄は端的に表現しています。

どうやらリモコン下駄はアニメが初出のようです（吸血鬼ウ・ゼース『ゲゲの鬼太郎（第二期）』一九六八年一月二四日放送。鬼太郎本人よりも下駄の方が出番があり実質下駄が主役）。そのアイデアが原作者によるものか、アニメ制作側によるものかはわかりませんが、アニメとなり、毎週のように敵妖怪と戦う場面を作る演出的必要性に迫られ発明されたものと思われまます。墓場から出た鬼太郎が、メディア展開していき、よりわかりやすくヒロイックな性質を獲得するなか、下駄の着脱というしぐさが「人間、あるいは善良な

妖怪のために妖怪と戦う」行為のために発生したのは興味深いことです。

ねずみ男との対比も面白いでしょう。いうまでもなくねずみ男は金に汚く俗っぽく実に人間らしく、よく人間の町にも出役しているシテイ派なのですが、かの愛すべき妖怪は常に裸足です。対してゲゲの森という妖怪達の領域に定住する鬼太郎は下駄を履いて、人間の世界に現れ、カランコロンと下駄の音と共に去つていく。ねずみ男と鬼太郎、二人のつかず離れずの関係性が二人の履物観にも反映されているかのようです。



図五 水木しげる『ゲゲの鬼太郎』より

博多地下鉄で回る伝説スポット 箱崎線編

九十九屋さんた

それなりに福岡に出かけていて、日数を足すと、人生で一年くらい過ごしている気がします。大つびらな観光地を回り切りはじめたのが、何気なく駅で降りて伝承のあるところを探してみるという遊びです。

主に地下鉄の一日券で行っており今回は箱崎線です。

●箱崎宮駅

箱崎宮 東区箱崎1丁目22の1



日本三八大幡宮のひとつとして、箱崎八幡宮とも呼ばれます。応神天皇と、神功皇后、玉依姫命を祀っています。

箱崎宮は平安時代に醍醐天皇が神勅によつて「敵国降伏」の宸筆を賜われ、筑前大分宮（大分八幡宮）より遷座されたものといわれます。

そのため鎌倉時代中期の元寇の際に龜山上皇が「我が身を以て国難にかわらん」と祈願され、神門に「敵国降伏」の御宸翰が奉納されました。その結果、博多湾に「神風」が吹いたという伝説が残ります。

箱崎宮前の浜（お潮井浜）の真砂をお潮井と呼び、これを「てぼ」と呼ばれる小型の竹かごに納め、持ち帰つて厄を払い、幸運を招く風習があります。

博多祇園山笠の始まりに、早き手達がお潮井浜で身を清めます。

こちらお祭り時期でない人もいなくてとても気分がいいので、福岡に行つたときに時間に余裕があるとよくいつて昼寝をしています。

